

Title	社会学論文集の序文
Sub Title	Sociological papers, preface
Author	山田, 賢司(Yamada, Kenji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.171- 173
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集都市・公共・身体 of 歴史社会学-都市社会学誕生100年記念- A編 ゲデス・プロジェクト 第III部 ロンドン社会学会の創立
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0175">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0175</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 第 III 部 ロンドン社会学会の創立

ゲデス研究会訳

“Preface,” Sociological Papers 1904 (1905): ix-xi.

### 社会学論文集の序文

本書に所収されている各章の内容は、基本的に、1904年の春から夏にかけて行われた社会学会の第一回大会の際に読まれた論文であり、さらに、それに引き続いて行われた議論の報告も付け加えられている。なお、学会の開会式の際にブライス (Bryce) 氏によって行われた講演の内容は、本書のイントロダクションとして掲載している。

本書にて取り扱われる主題は、次の三つの論点にまとめられる。

#### 1. 社会学の歴史および方法論

この論点については、デュルケム (Durkheim) 教授とブランフォード (Branford) 教授によって記されている。社会学の領域と定義に関する論文において、デュルケム教授は、この種の難問に焦点を当て、支配的な見解を包括的に論じている。この論文は内外の多くの主導的な社会学者から議論を引き出し、会議に参加したフランス、ドイツ、イタリア、ロシア、そしてオランダの社会学者たちの間で、まさに国際的なシンポジウムとなった。しかし残念なことに、デュルケム教授の論文についての準備が遅れてしまったため、アメリカの社会学者は議論に参加することができなかった。ただし、彼らの多くは社会学会の設立を歓迎しており、学会設立に対する熱心な支持を表明している。

## 2. 周辺領域の問題についての先駆的な研究

この論点に関しては、ウェスターマーク (Westermarck) 博士と H. H. マン (Mann) 氏の論文によって示されている。前者に関していえば、博士の研究内容からは離れて、社会学者が取り組まなければならないことがある。その理由として、その研究課題が優れた社会進化の理論の構築にとって不可欠であること、また、その研究課題は他の組織化された専門家集団によって十分に手をつけられていない領域だということがあげられる。換言すれば、社会学者は、婚姻、戦争、スポーツ、階級分化などの課題に対して、専門的な研究を行うべきなのである。というのも、これらの課題は、準科学の領域から社会学の領域のなかにまだ十分に引き込まれていないからである。マン氏の論文は、イギリスの村落共同体内部における家計に関して、重要な調査結果を提供している。なおこの論文の成果は、シーボウム・ロウントリー (Seebom Rowntree) 氏のご厚意により得られたものである。この論文は表向き経済的な事象を扱っているけれども、人口統計学にも貢献するのと同様に、おそらくは社会学的研究としても取り上げることが要請されるものと思われる。

## 3. 応用社会学

この論点については、ゴルトン (Galton) 氏の「優生学」に関する論文と、ゲデス教授の「都市学」に関する論文で示されている。両論文は全く別個のものとして公表されているものの、お互いに関連しあっていることが読み取れるだろう。一方は市民について扱い、もう一方は都市について扱っている。しかし、人口問題と居住問題は、生物 (organism) と社会 (environment) の相互依存性を明らかにするために、生物と社会に関するより包括的な文脈に位置づけられねばならない。両者〔市民と都市〕は、当該の二つの論文において、それぞれ異なる分野に位置づけられるが、将来は必ずや、〔生物 (organism) と社会 (environment) の相互関連を扱う〕応用社会学のなかに統合されるであろう。現在のところ、応用社会学の概

念は、その新奇さによって注目されているだけである。それゆえ、研究者たちは包括的な概念の新奇さだけをとらえて、ゴルトン氏やゲデス教授によって提唱された応用の一部に対して、偏った判断をしないようにしてほしい。

本学会はゴルトン氏から二重に恩恵を受けている。第一に、氏が退職してから学会の基盤が形づくられるまでの間に、学会設立のために労力を提供していただいたということである。第二に、氏の論文「王立協会特別研究員における親族集団による業績」を本書に所収することに同意をいただいたということである。ゴルトン氏によるこの論文は、「優生学」に関する彼の主張を理解するのに非常に好都合である。なぜなら、この論文は元々、ゴルトン氏が社会学会に対して提唱している「家族繁栄のための指南書 (Golden Book)」へと至る一段階になっているからである。

編集委員会\*は本書の準備に関わった多くの協力者の方々に感謝申し上げたい。なかでも、翻訳を担当してくださったB. E. マイヤー女史やJ. A. ケイブル氏、W. マクドナルド氏の協力は甚大なものである。そして、校正を担当してくださったジョージルイス、J. P. 氏にも感謝申し上げたい。

最後に、本書のあらゆる論文、議論、そして報告の内容に関する一切の責任は、各著者や発表者にあることを明記しておきたい。

(山田 賢司訳)

---

\* 編集委員会のメンバーは、L. T. ホブハウス氏 (委員長)、ゲデス教授、G. P. グッチ氏、J. A. ホブソン氏、ベンジャミン・キッド氏、J. M. ロバートソン氏、そしてV. V. ブランフォード氏 (名誉書記) である。なお当委員会は、初期の段階において、H. G. ウェルズ氏からの協力を得ていた。